エンカウンター（ＥＮＣＯＵＮＴＥＲ）

第２６９号

2024 年 9 月 1 日

編集・発行人　〒224-0015　横浜市都筑区牛久保西 2-14-28　山口周三

電話　080-1232－0905

http://encounter.agape.wjg.jp

小西芳之助導源「エペソ人への手紙講解説教」より（３）

パウロが高円寺東教会に宛てて書いた手紙

第１章の第１５節から終わり２３節まで、これは原語では一つの文章、１ sentence であります。この場所は、エペソ信者に対する感謝と祈願を述べている場所でありまして、これはパウロ先生が、エペソにあてた感謝と祈願たるのみならず、小さきこの高円寺東教会に対してパウロ先生がお書きいただいた感謝と祈願と見てよろしい。

イエス・キリストに対する信仰、そしてすべての聖徒に対する愛、この信仰のゆえにすべての聖徒に対する愛と、この信仰と愛とをあなたがたが持っていることを耳にし、それを聞いて、私は祈りのたびごとにあなたがたを覚えて、絶えずあなたがたのために感謝していると。

この１５節、１６節とはすなわち、エペソの信者たち、我々高円寺東教会の信者たちとの信仰と、そして聖徒たちに対する愛、信仰と愛とを聞いて、

天から見ておって、そして神に感謝すると。そして感謝するのみならず、祈っているということを書いている。感謝と祈りです。

パウロの祈りの目的

パウロは、君たちの信仰と、キリストに対する信仰、3 節から 14 節までに述べたこの神の恵みのキリストの贖いをあなたたちが信じて、そして聖徒たちに対して愛を持っている、信仰と愛とを聞いて、私は喜んでいる。神に感謝している。そして祈っていることは、あなたたちが聖霊を神様から頂いて、いよいよ明らかな目をもつに至ること。そして、私が祈っている３つのことを達成するように。

第1は、神があなたたちに与えている望みというものが如何に偉大なものであるか。

第 2、その望みの内容、すなわちイエスが再臨し給うて我々が復活する時に、我々はその栄光、その光栄というものは如何に絶大なものであるか。

第 3、その信仰、望みを、神の偉大なる力によってお前たちに神様が与えて下さって、そして神はその信仰、望みを実現して下さる、その神の力がいかに偉大なものであるかということをあなたたちが知るように。

これが 3 つの目的であります。

望み、復活ということがキリスト教のすべて

望み、キリスト再臨し給うて、我々が復活する。この望み、これが今日のエペソ書の劈頭、第1に信者に出て来る言葉です。来世のことです。この世で実現する事ではない、来世に実現することでありますけれども、この望みということがキリスト教の中心、キリスト教の全部と見てよろしい。これによってパウロは、あの偉大なる伝道が出来た。

ロマ書も、第 15 章 13 節に、「望みの神が、聖霊によって、君たちの信仰と愛をいただいている、この望みに満ち溢れんことを」と、ロマ書は、「望みに満ち溢れよ」という言葉をもって終わっている。コリント第1の手紙にも、カルビン言わせれば、第 15 章、復活を述べるために、コリント前書は書かれたと言っている。

ことほどさように、「のぞみ」「復活」ということが、これがキリスト信徒の全てである。

復活の望みを心に燃やせ

本日は一言、私はこの望み、復活の望みということは、我々はいつも中心である、命の中心である復活の望みを、我々はいつも忘れがちです。この世のことに紛れて、偉大なる力の源であるこの望みを忘れがちでありますから、私は望みのために称名を勧めたい。称名をしたい。「我が主イエスよ」と主の名を呼んで、神様から聖霊をいただいて、この復活の望みを、神様に我々の心に燃やしていただきたい。これが第 1.

第 2 は、この望みの効用、現世、現代にこの望みの効用、毎日この望の効用の力、望みの力を味わいたい。これが最近の希望であります。

宗教の本領は来世

それから、その 10 年前に読みました内村先生の『一日一生』、11 月 15 日。エペソ書、本日の説明として、レッスンとして大変適当ありますから、もう一度読ませて頂きます。

「人は生まれながらにして現世的である。彼は、来世のことはこれを思わざらんことをつとむ。彼に現世的なるを勧める必要は少しもない。水の低きにつくがごとくに、人は地につくものである。而して宗教は、人を地より天に向って引きあぐるために必要である。宗教にして、明白に来世的ならざらんか、世に来世を示すものは他に何ものもないのである。言うまでもなく、宗教の本領は来世である。政治、経済の本領が現世であるがごとくに、宗教の本領は来世である。来世を明白に示さず、これに入るの道を明白に教えない宗教は、宗教と称するに足らざるものである。宗教は、人を現世の外に導き、彼の来世獲得の道を供して、間接にしかも確実に現世を救うのである。」

信仰、愛、望みは、神様からの賜物

信仰といい、愛といい、望みというのは、これはひとえに神様からの賜物でありまして、霊の賜物です。そうでありますので、生まれつきの我々は、これを理解することが出来ない。ここにキリスト教の難しい点がある。難しい点と共に、またこれは易しい点です。神様からもらうのですから。自分の努力、自分側の努力によって獲得するのではないのですから、万人がいける。そうですから、難しいとともに優しい。これは神様からもらうんだから。そういう意味におきまして、パウロは、前回第1章15節から19節まで、そういうことを述べた。

キリスト教というものは、生まれつきのままをもってしては理解することは出来ない。ひとえに聖霊の神の知恵の働きによって、それを頂戴して分かるものです。そしてそれがいかにも世間離れしておって、何もこの世には役に立たないように我々は思いますけれども、それがいかに人生において、本当に恵まれた、それがいかに人生に慰めと力を与えるものであるかということは、パウロはよく知っている。そうですから、パウロは繰り返し繰り返しそのことを言っている。

キリストをすべての権力の上に置かれた

「神はその力をキリストのうちに働かせて、彼を死人の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右に座せしめ、彼をすべての支配、権威、権力、権勢の上におき、また、この世ばかりでなくきたるべき世においても唱えられる、あらゆる名の上に置かれたのである。」（エペソ１：20－21）

神はその偉大なる力を働かせて、キリストのうちに働かせて、彼を死人のうちからよみがえらせた。天上において自分の右に座せしめた。これは、神がキリストを通じて我々の贖いを成就して、我々の救いを成就した神の偉大なる働きを述べた。神がキリストを十字架につけて、人類の我々すべての罪を贖って、彼を復活せしめて、そして自分の右に座せしめた。この神の偉大なる力、働きによって贖いが成就して、我々が救われて、神の子とされた。これを福音という。

そして天上において、ご自分の右にすわらせて、そしてその上に神は、キリストを全ての支配、権威、権力、権勢の上におき、またこの世ばかりでなく、来るべき世においても称えられる、あらゆる名の上におかれた。キリストを全ての上に、全ての権力におかれたと言う。そうですから、キリストというものはいかに偉大であり、いかに力強い者であるか。そのイエス・キリストが我々信者のために、いつもとりなしていて下さる。

我らはキリストの身体

「この教会はキリストの身体であって、すべてのものを、すべてのもののうちに満たしている方が、満ちみちているものに、ほかならない。」

（エペソ１：23）

教会はキリストの身体であると。教会というのはキリストの体でありますから、教会というのは、信者の団体、世界中の人類の信者の団体、これが教会です。また高円寺東教会というのはこの小さな信者の団体、これも教会です。そしてもうひとつ、私個人、信者もこれは教会を組織している一人ですから、これも教会と言っていい。人間の体は聖霊の宮だと言われますから。ただ教会というものは、これは信者の団体、即ち世界中の信者の団体、またこの小さな高円寺東集会、またその教会を組織している我々一人一人が、教会と見ていい。そうですから、この教会はキリストの体だという。本当に我らは信ずるときに、我らはキリストの体なのです。

信者とはキリストを信じる者

これは要するに、信者とはキリストを信ずる者です。どういうふうに信ずるかと、これが問題です。キリストというのはどういう人であるか。キリスト教という者は、キリストをいかに信ずるかということにかかっているのだから。キリストが過去においていかなることをなしたか、現在何をなしつつあるか、将来何をなすかということ、真理の御霊の示すところによってそれを信ずると、これをキリスト信者と言う。自分の行ないではない。キリストが過去において何をなしたか、現在何をなしつつあるか、将来何をなすかというそのキリストの力、それを信ずるものを、それをクリスチャンという。

しかしその信仰と言うものは、よろしいか、その信仰と言うものは、我々が聖霊の真理によって示されましても、我々自身という者は罪人でありまして、誠にそのキリストの真理を持つのにふさわしくない者です。その真理によって、聖霊によって示されたことも、平生は隠れている。自分の思いばっかりが表へ出てしまって、　　真理が隠れている。

「主の名を呼ぶ」という行

我々は示された信仰というものを継続し、それを完成するためには、どうしてもここに、神様から示されたところの行というもの、行ないというものが必要になって来る。それを私は「妙行」と言っているのですが、内村先生は「主を仰ぎ見る」という行をお取りになりました。ロマ書には、「主の名を呼ぶ」「主の名を呼ぶ者は救われる」と、「主の名を呼ぶ」という行が書かれている。そうですから、我々罪人である人間は、この神から示された妙行、主の名を呼ぶという行を努めて、そして神から示された深い真理、信仰の真理を継続し、これを完成することが出来る。これが、パウロがロマ書第 10 章 9 節 10 節において、称名、主の名を呼ぶということを救いの条件とした理由です。